

Title	青竜刀形石器考
Sub Title	A study of stone objects in the shape of Chinese broadswords
Author	江坂, 輝弥(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.1 (1965. 6) ,p.75- 102
JaLC DOI	
Abstract	Polished stone objects in the shape of broadswords (Figures 1 2), used in China in relatively modern times, have been uncovered from over a wide area in the northern district of Japan, namely from Akita, Iwate and Aomori Prefectures, and from southwestern Hokkaido. Most of the excavated stone broadswords measure about 30 cm in length, with some having a length of 36.5cm. However, the largest stone broadswords found to date were excavated at Kami-no-Kuni Village in Hokkaido, measuring 37.5cm in length, and at the Saibana site in Mutsu City, Aomori Prefecture, measuring 38 cm in length. Examples of stone broadswords, shown in Figure 3, were excavated from Middle Jomon culture sites. Each sword has a round bulb-like protrusion midway between the blade section and its hilt. Examples shown in Figure 6 are stone broadswords excavated from Later Jomon culture sites. The blade section of stone broadswords excavated from Middle Jomon culture sites is semi-circular in shape, short, and has no bulb-like protrusion, whereas, stone broadswords from Later Jomon sites disclose a blade section which is oval in shape, long, and with a small bulb-like protrusion. The lower photograph of Figure 1, showing stone broadswords (same as
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0075">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0075</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 青竜刀形石器考

江 坂 輝 弥

ここに研究報告をしようとする石製品は、全面を丹念に研磨して製作した青竜刀の形に類似した奇異な形をした石製品である。石質は硬質な安山岩類を使用したものが多い。最近の調査研究により北は北海道渡島半島基部の寿都町付近より、南は宮城県北部の登米郡付近にまで分布圈を持つもので、この地方の縄文文化の中期から後期の遺跡で出土すること、中期から後期への変遷について明らかにすることができた。本稿は筆者の最近の研究成果についての紹介であり、まだ多くの補足する点もあると考えるので、研究者諸賢からの忌憚のない御批判、御示教を希望するものである。なお本石製品は奇異な形をしているため、比較的早くより好事家の目に止っていた。先づ最初に本石製品の研究史から稿を進めることとする。

## 研究 史

青竜刀形石器が文献に最初にあらわれたのは江戸時代後半のことで、この頃は本草学から発展して、自然、人工の各種の石を蒐集する弄石趣味の人が非常に多くなり、木内石亭を中心とする弄石社なる趣味人の集りもできた時代である。これを最初に紹介した著書は、一八〇一（享和元）年 木内石亭の著した雲根志三篇五卷の十三に『安永八年己亥夏六月、奥州松前江指村、村上氏より京師河村氏へ贈る所の神代石甚異品なり。予これまで見聞に及ばず。其形状青竜刀ともいふ』

べし。石質硬くして色薄白く、近ごろの奇物なりといへども、至つて上品とはいひがたし。村上氏いふに、江指村の近郷熊石といふ所の山中より穿得たりと。』記している。

石亭は木内小繁重きうちこはん暁といい、号を石亭と称した。一七二四年（享保九年）滋賀県坂本に生れ、後に縁戚であつた木内小兵衛の養子となり、一八〇八年（文化五年）三月、八十五才で亡している。彼は当時、自然の奇石、古代の石製品などを趣味として蒐集研究する弄石社中の中心人物で、全国の奇石蒐集家と文通し、蒐集品の交換なども行つていた。

この種石器を見て、その観察結果を、『其形状青竜刀ともいふべし』と記したのは本記録が最初のものであろう。今日の青竜刀石器。青竜刀形石器の呼称も、この雲根志の記載に由来したものと思われる。

また同じ頃、菅江真澄の著した『真澄遊覧記』の中にも説明を付さずに青竜刀形石器の完形品の図が一点図示されており、また一七九三年（寛政五年）田邨三省が著した『会津石譜』の中にも、石川県の大聖寺候（前田旧子爵家）の所蔵という青竜刀形石器が図示されているが、いづれも発見地は記されていない。

以上に記したごとく、既に江戸時代末期に三点以上の標品が世に知られていたわけである。

また明治初年、奥羽地方の各地を遍歴し、土器、石器などの蒐集をしながら絵を描いた岐阜県安八村結の人、土岐源吾（号して叢虫山人という天保七（一八三六）年生れ）が青森県下に残した絵の中には、青森県西津軽郡鯨ヶ沢町種里の八幡社の神宝と称する青竜刀形石器二点が描かれている。

この青竜刀形石器を描いた絵は現在青森市の成田祐之氏宅と、南津軽郡浪岡町の八幡社に保存されている。

明治年間に入つて學術書で本石製品を最初に取りあげたのは神田孝平の「Ancient Stone Implemets, Sc., Japan 1884（明治17）年」の「Plate X」に「Seiriuot-seki」として記載され、翌々年、明治一九年刊の前掲書の和文解説「日本太古石器考」には「第十図版第二十図、原形三分一 俗ニ青竜刀石ト名ツクル者ナリ、形ハ裁布刀ニ似タリ質ハ緑泥岩

ナリ、第三図青竜刀石ノ柄ヲ欠損セル者ナリ」と記している。

また翌年、明治二十九年九月刊の東京人類学会雑誌二卷十九号に同氏が淡厓迂夫の筆名で、「津軽ノ好古家藤田氏ヨリ送ラレタル古物ノ記」と題する短報を執筆、その中で、青森県東津軽郡三厩村<sup>みんまや</sup>算用師<sup>さんようし</sup>官山の出土品と、西津軽郡鰺ヶ沢町の八幡社の神宝の青竜刀形石器2点の計3点を紹介している。

また明治二十三年八月刊の東京人類学会雑誌五卷五十三号には坪井正五郎の「ロンドン通信」が掲載されているが、この中に大英博物館の所蔵品中に大和某地出土という長さ一尺一寸五分の青竜刀形石器があることを図入りで報告されている。大和某地は恐らく日本某地の意味で、恐らく奥羽地方北半部からの発見品と考えられる。

形が特徴あるものであり、神田孝平の著書に掲載されて以後、明治時代にもいくつかの類例の報告が学会誌上に紹介されたのであるが、この種石器の用途、伴出時期、分布圈などについてまで研究を進めたものは皆無であつた。大正から昭和にかけて一九五〇年頃までに刊行された多くの概説書 図録類には全く未記載のものが多く、若干の記載のあるものでもこのような石製品が僅少例存在することを記しただけのものが多かつた。

一、二注意を引くものを紹介すれば、

明治三九（一九〇六）年 博文館刊、中沢澄男、八木槌三郎共著の「日本考古学」では第一篇、先史時代 第三章遺物篇 四器物使用考イ石器類で石器類を用途から見て、(甲)日用石器、(乙)武器類 (丙)漁業用 (丁)宗教用 (戊)装飾用 (己)雑用の六類に区分して解説、青竜刀石は武器類に入れ、「此類の品は甚だ乏しけれども又稀れに出づ、名称は頗る不適當にして寧ろ鈍石とも言ふ可きなれ共、従来慣用の久しき却て理解に便なければ右に従へり、用法は武器と思はるゝにより茲に出せり」と記している。

昭和三（一九二八）年、工芸美術研究会刊行の杉山寿栄男編著「日本原始工芸概説」では二十八頁に「青竜刀石斧は、

早くから学界の注意があつたにかゝらず、その性質等は明にされてはゐない、その形状は挿絵に示す様に、いさゝか青竜刀の様な形を呈し、長き柄と、幅広き刃部とより成つてゐる、刃部は決して鋭利なものではなく、之に縦の溝が作られ、柄部に近く疣状突起を出してゐるものがある。石質は硬砂岩等が多い。」と記している。

また昭和四年九月、岡書院刊行の中谷治宇二郎著『日本石器時代提要』では第七章人為的遺物、一石製器 第二節磨製石器の項で、五、青竜刀石斧として二九五頁から二九七頁にわたつてかなり詳細な論考を発表しているが、中谷氏は『この器の用途については、未だ定つた説がなく、その注意が旧いに拘はらず、漠然と過されてゐるのは一つには形の奇異と、発見例の少い為である。例品は私の知つてゐる限りでは、文献に現れたものを加へても十例あまり多くは越えず、羽後を中心に、陸奥地方に及んで分布してゐる様である。形は、刃部の、弧形を呈して張出してゐる方が反つて刃ではなく、こゝは幅広に、多くは中窪みに一条の溝を通じ、基部に近く一個の疣状突起を出してゐる。そうして、背と思はれる方が薄く、丁度内反石劔の様な工合になつてゐるのである。或はその石劔の様に、こゝを刃に用ひた時期があつたのかも知れないが、……中略……改めて伴出物、発見遺跡等による研究が試みられなければ、未だ何とも云へない。ただそれにつけても思ひ出るのは、有角石斧の事である。

石器の形の突然な変化が、異質文化の影響だと考へられる場合があれば、青竜刀石斧もそんな考へ方が許されまいものでもない。東北地方、特に羽後 陸奥地方では、金石器の弥生式遺跡にこそ欠けてはゐるが、その陸奥式遺物と称される精巧品は、丁度この文化期に相当するものを、縄文石器時代のまゝで通り過ぎたものとも考へられる場合があるし、異質文化——大陸文化の影響を間接に受けたと思はれる玉器の発見等もあるのである。然しこれ等は何れも将来の研究にかゝるべきものである。』と記している。中谷氏は関東、奥羽地方南部に分布する有角石斧と同様に、西日本の弥生文化の影響を受けて、奥羽地方北部の縄文文化の終末期に突然発生したものではないかとする新説を発表されたわけである。しかし

後項で記すようにこの種石製品は縄文時代の中期から後期末までに存在したもので、晩期の時代のもではなく、中谷氏の推論は誤つたものであることが判つてきた。またこの種石製品を石斧の名称で呼ぶことも妥当性を欠くものである。

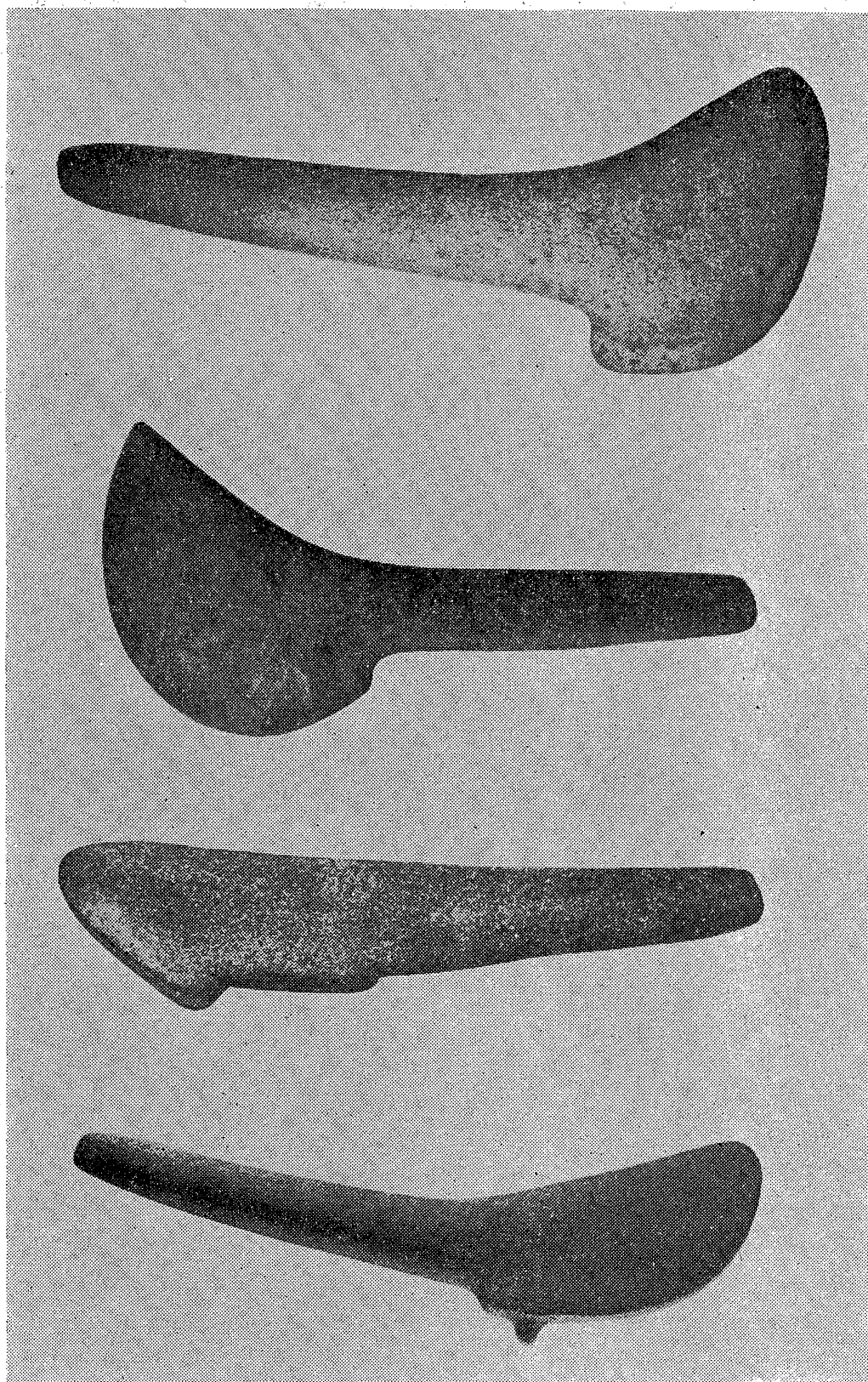
中谷氏はさらに昭和九（一九三四年）四月刊行の考古学五巻四号にも「日本石器時代に於ける大陸文化の影響」と題する論考を発表、前記の著書と同一見解において再論している。

昭和十八（一九四三）年十一月、續文堂刊の後藤守一著「先史時代の考古学」と題する少年向き著書では「青竜刀に形が似てゐるといふところから、いつの頃か青竜刀石器と呼び出したのですが、あいにく、その刃にあたるところが、刃があるどころか、かへつて厚くなつて居り、その上に浅い溝が出来てゐるのです。私にもその用途が想像つきません。縄文式文化のものであり、しかもその晩期に東北地方の青森県及びその近くの地方から稀に発見されてゐるだけです。」と記している。

昭和二十六（一九五一）年四月、改造社刊・酒詰仲男、篠遠喜彦、平井尚志編著 考古学辞典では青竜刀形石斧の項目があり、「縄文式石器の一種。東北地方の後期遺跡から発見される特別の石器で、類例は非常にすくない。これは又時に青竜形石刀とも呼ばれる」として記している。また同年十二月、創元社刊、小林行雄著 日本考古学概説（創元選書）「第六章 縄文式時代の工芸」の項で（五〇頁）「磨製の手法の発達をも体験し、晩期の頃になると独鈷石、石冠 御物石器 青竜刀形石器などの実用利器の圏外にはずれた各種の形の器物を、入念な磨製の手法で作り出すところまで、技術的にも生活的にも、余裕を生じてきたものと考えられるのである。」と記している。

以上に記したような見解が二十世紀前半頃の青竜刀形石器に対する考古学者の常識的見解であり、この種石製品に対して深い注意をはらおうとした学者はほとんどなかったようである。<sup>(1)</sup>





第一図 (Fig.1) 青竜刀形石製品

上より 秋田県鹿角郡小坂町上向小字鶴<sup>かみむこう とんど</sup>  
青森県四津軽郡深浦町<sup>とどろき</sup>轟木字津山  
青森県むつ市田名部町最花  
岩手県九戸郡軽米町上尾田小字館

## 本 論

筆者が青竜刀形石製品に興味をもち出したのは昭和二八年頃から青森県下の縄文時代前期後半の円筒土器下層c式d式などの遺跡の発掘調査を実施するようになってからのことである。

一般に青竜刀形石製品は奥羽地方北部の晩期の遺跡から稀に発見されるものと考えられてきたが、どうも中期の円筒土器上層式に伴うらしいものが存在すること、前期末の下層d式土器に伴う石製品に青竜刀形石製品の祖形をなすものではないかと思われるものが存在することなどからして該石製品の製作時期の究明、使途の究明に興味を抱くに至った。

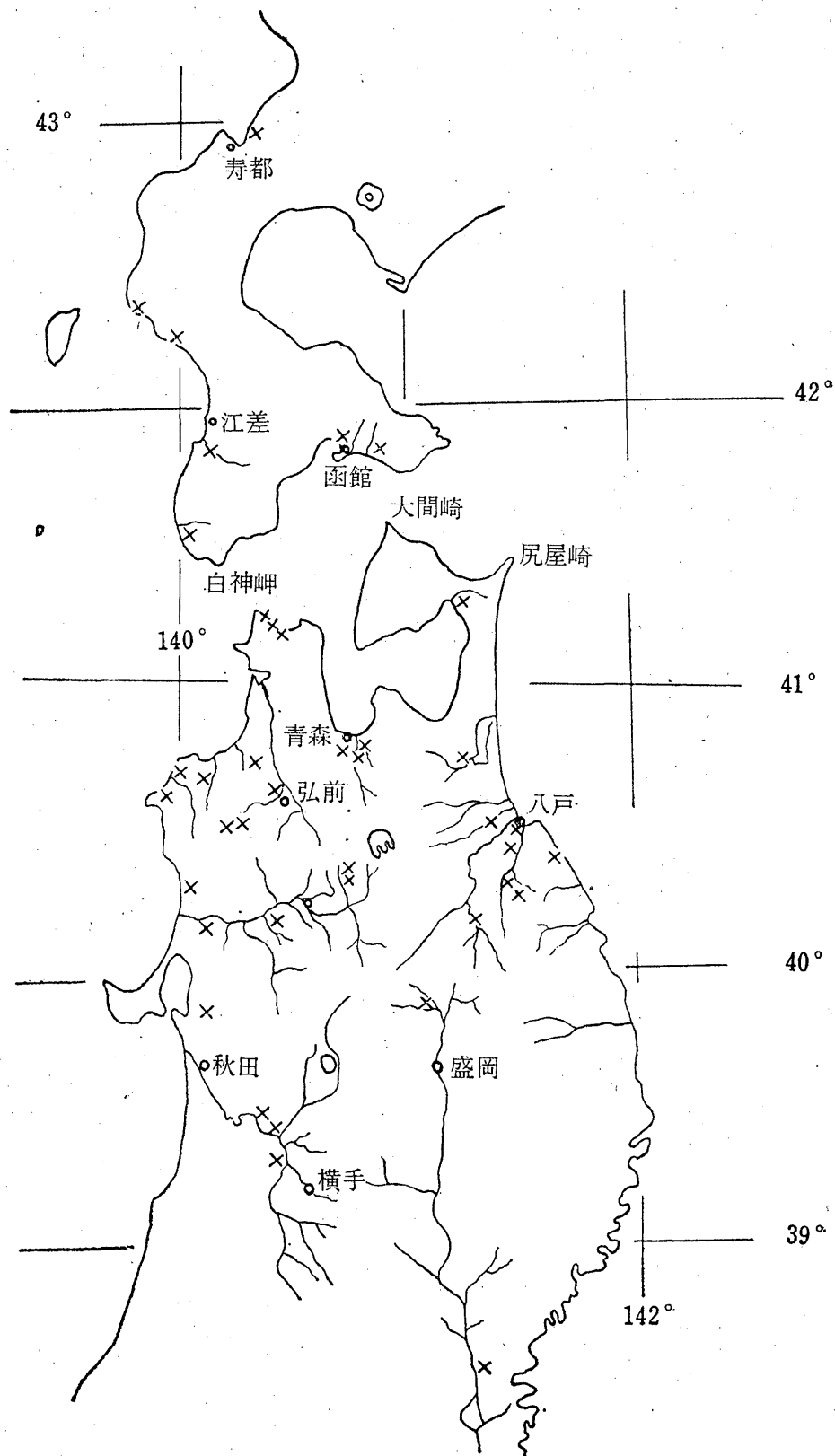
そこで先づ該石製品の集成と、その分布圈について研究を開始した。そして昭和三五年一〇月、大阪市立美術館で開催の日本考古学協会第二六回総会の折り「青竜刀型石器について」と題して、それまでにまとめられた一応の成果を公表したのであった。

今回はそれ以後に集められた資料も加えて、今日までの研究成果について報告するものである。本稿で意を充分つくせぬ点は今後引き続き研究を進め補正してゆきたいと考えている。

**分布圈。** 分布図 出土遺跡地名表にも記したように、北は北海道渡島半島北部の寿都町美谷付近まで発見例が知られ、南は宮城県登米郡東和町にまで及んでいるが、その多くは渡島半島南半部から、奥羽地方北部の地域にかけての発見品で、円筒土器の文化圏と大略一致した地域である。即ち奥羽北部では馬淵川流域及び米代川流域までの地域から多くのものが発見され、それ以南の地からの発見例は六例を数えるにすぎない。

現在出土地の明らかなもの、出土地が大略知れるもので、筆者の手許に記録できたものは地名表に示した四五例である。このほか大英博物館にある大和出土と称するもの、東京国立博物館に出品されている桜井克興氏所蔵の出所地不詳の





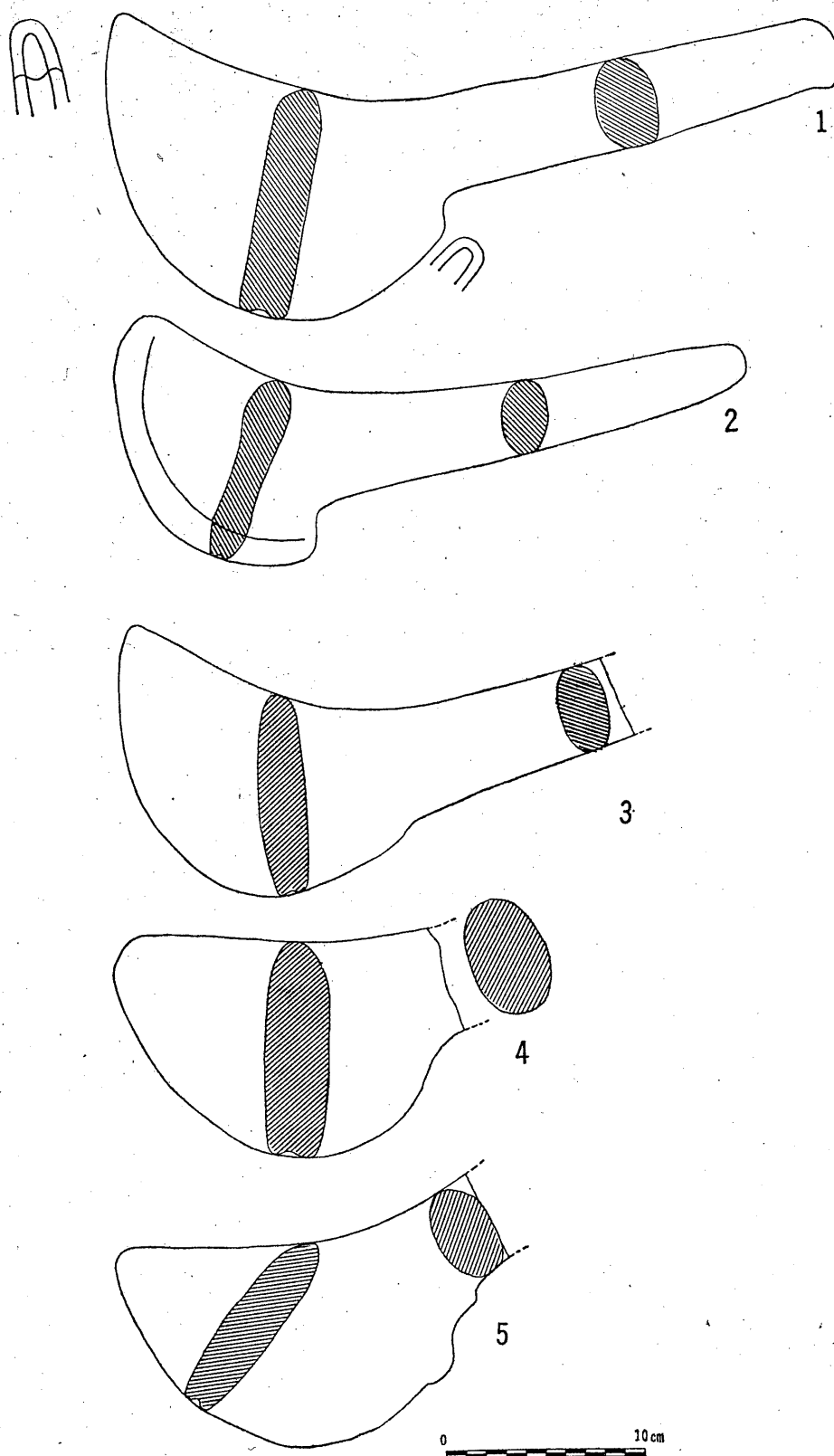
第二図 (Fig. 2) 青竜刀形石器発見地分布図

完存品（長さ三八・八センチ）故柴田常恵氏旧蔵の青森県下出土という長さ三一・五センチの完存品、古美術商M氏が手がけた青森県下出土と称するもの、現在関西大学文学部考古学研究室に保管中の旧本山考古室蔵品であつた長さ三五・二センチの緑泥片岩製の該石製品など五例を加えることができるが、このほかに未だ筆者の目にふれぬものが、少くとも数例存在するようであり、今日五十例以上の青竜刀石製品が出土していると推定される。

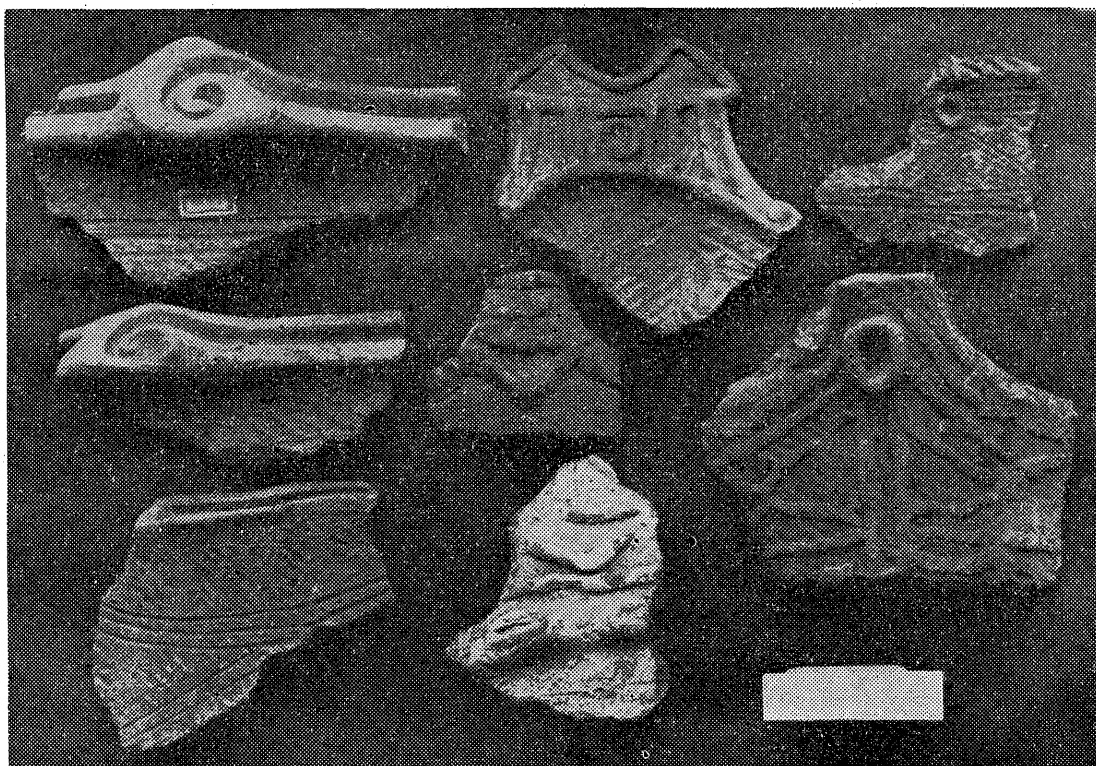
**製作の時期と形態の変遷** 前記したように一般には晩期の時代の作品と考えられていたが、第三図に示した青森県津山、秋田県鶴たきと、青森岡崎、秋田県刈かり和野わの発見のような、刃部にあたる部分の基部に小突起を持たない形の青竜刀形石製品は中期の時代の作品と考えられる。

第三図1（第一図2）の吉田清氏蔵の津山出土という青竜刀形石製品は明治四〇年頃の発見で、筆者が同氏宅を訪れた時には病氣入院中のため、その出土遺跡の確認はできなかった。私より前に同氏宅を訪問した村越潔氏は、同氏が同地の某氏より古くもらいうけたものであり、その人に問合せば判るとの返答であつたという。筆者は吉田氏令息からとどろき蘆木部落のはずれの台上畑地に多数の石器を出土する遺跡の存在することを聞き、同令息の案内で遺跡を実査した。遺跡は国道東側の海岸段丘上にあり、縄文時代前期末の円筒下層d<sub>1</sub>式と同d<sub>2</sub>式の土器片が見られた同日広い遺跡地の一巡では中期の土器片は認められなかったが、恐らく円筒上層a式 b式は地区に異にして出土する場所があるものと推察され、吉田氏蔵の第三図1（第一図2）の石製品は恐らくこの蘆木宇津山地内の遺跡から発見のものであらうと考えた。もしそうであるならばこの石製品は前期末から中期前半の作品ということになる。

また第三図4の秋田県刈和野の農林省農地試験所付近発見の該石製品は、その伴出土器片を、西仙北町公民館で実査したところ、大木7b式に該当する破片が最も多く、大木9式の破片は1、2片より認められなかった。図4の石製品が大木9式土器の時代の作品であるかもしれないが、8又は7b式まで逆上り得るものかもしれない、図1の標品と共に注意



第三図 (Fig.3) 縄文時代中期の青竜刀形石製品  
1. 津山 2. 鍋 3. 岡崎 4. 刈和野 5. 美谷



第四図 (Fig. 4) 秋田県小坂町鶴遺跡発見の土器片

すべき標品と考える。

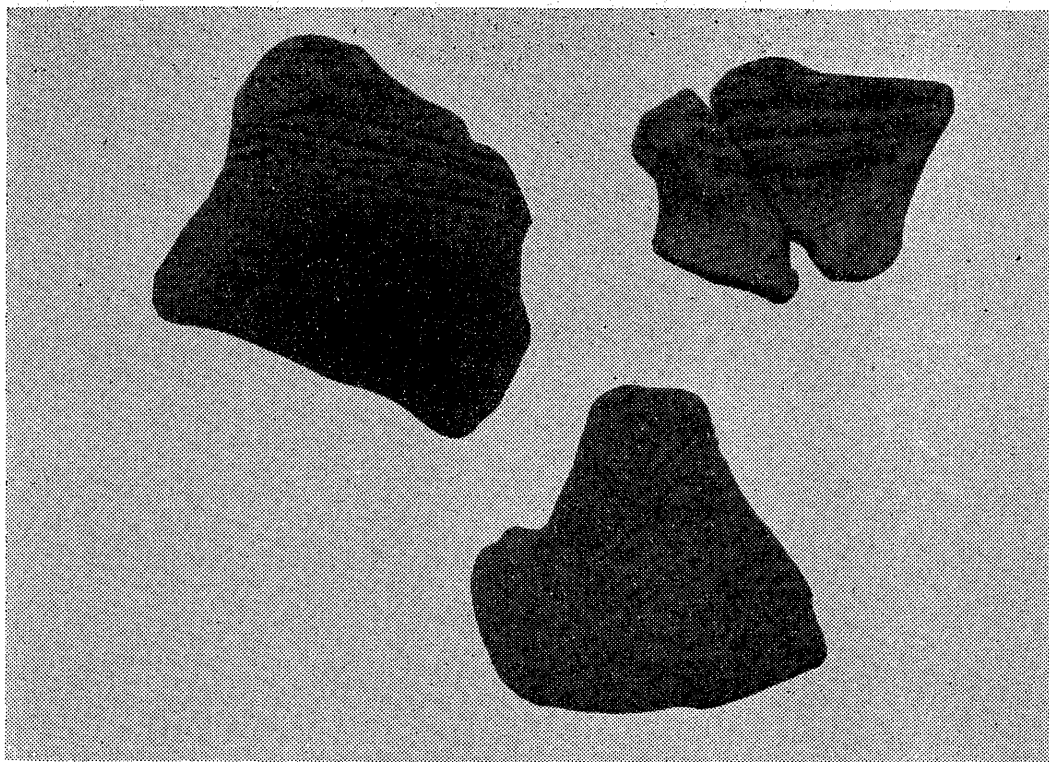
第三図2の秋田県鶴遺跡<sup>とくど</sup>発見の該石製品と共に発見された土器片は第四図写真に示したようなもので、写真左端3片は大木8b式近似の文様構成であり、中央3片と右端2片は円筒土器上層d式の口縁部破片であり、この石製品は中期末頃の作品であらうと推察される。

第三図3は青森県深浦町岡崎遺跡の出土品であり、柄部の先端近くが欠損したものである。本例も刃状部分の基部に見られる小突起を欠くものである。本遺跡も中期後半の土器片が見られる遺跡である。

第六図1に示したものは北海道久遠郡大成村<sup>みやこ</sup>都遺跡<sup>みやこ</sup>発見のもので、刃状部に溝も小突起も見られない。本遺跡からは中期後半の円筒土器上層d式 余市式土器片が発見されている。

このほか形が異なるが第一図3の写真に示した青森県むつ市<sup>さき</sup>最花<sup>ばな</sup>出土のものも中期後半の作品と考えられる。最花神社わきのこの石器の出土したという崖面付近には中期末の土器片が断面に露出していた。

第三図5は北海道寿都郡寿都町<sup>びや</sup>美谷<sup>みや</sup>小学校敷地内出土のもの



第五図 (Fig. 5) 北海道寿都町美谷小学校校庭出土の土器片

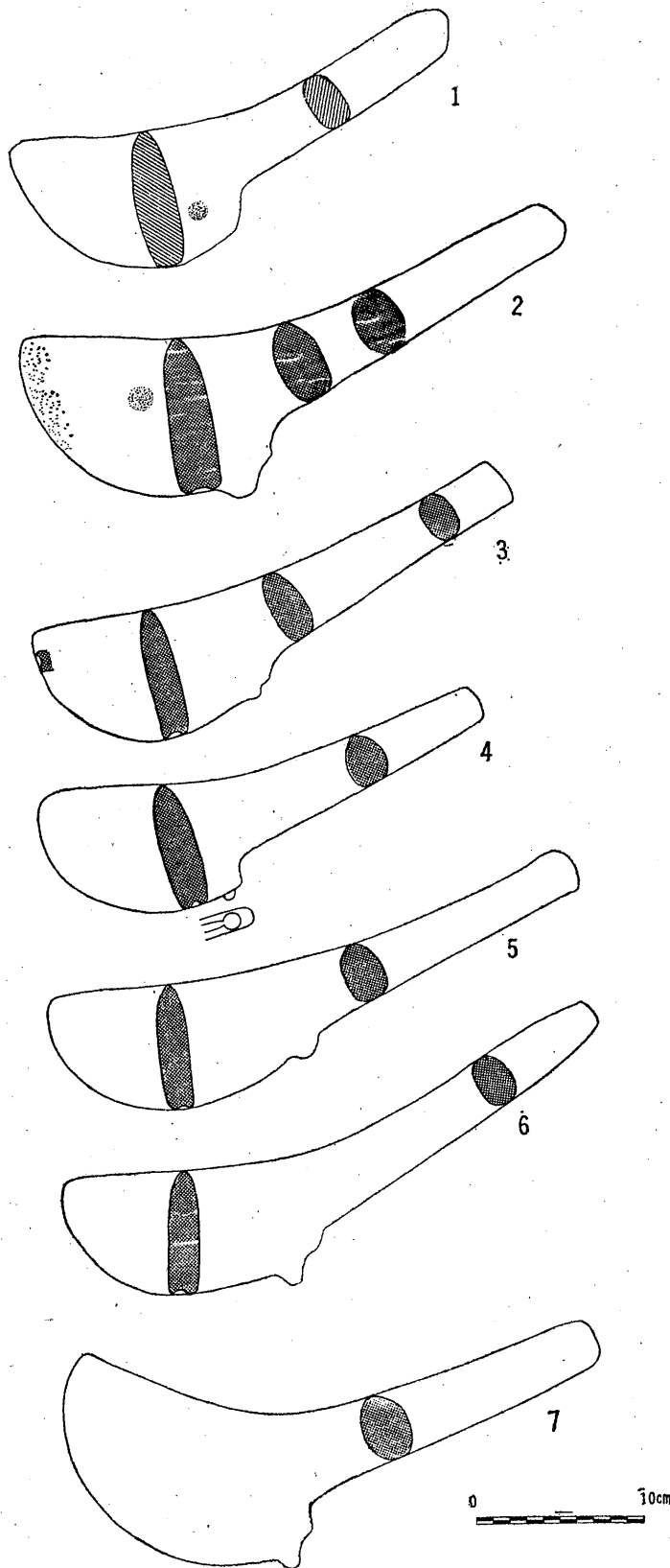
で、本石製品の分布の北限をなすものである。伴出土器は第五図写真に示したような後期前半の形式の土器片である。本石製品は柄部を折損している。刃状部の基部にあまり顕著ではない小突起が見られる。しかし刃状部全体の形はまだ中期のものに近い形態をしている。

第六図2は岩手県軽米町袖ノ平遺跡発見のもので、中期末の最花式土器か、後期初頭の土器に伴存したと思われるもので、刃状部が半円形に近く、基部に高さの低い小突起がある。

第六図6は軽米町上尾田小字館遺跡発見のもので、青竜刀形石製品として最も形の整ったものである。このように優美な作品は後期後半に製作されたものらしい。本遺跡からは疣状の小突起で飾られた後期末の土器片が表面採集できる。この時期のものは刃状部が楕円状に長くなり、基部の小突起の高さが高くなってくる。しかし基部の末端部で柄部に接する顎状の部分は中期のものより低くなり、中期のものに比較して顎状の部分は顕著でない。第六図に示した岩手県種市町櫃割、同県一戸町峠、青森県弘前市川原平、秋田県鷹巣町藤株遺跡発見なども後期末近い時期の作品の好例である。

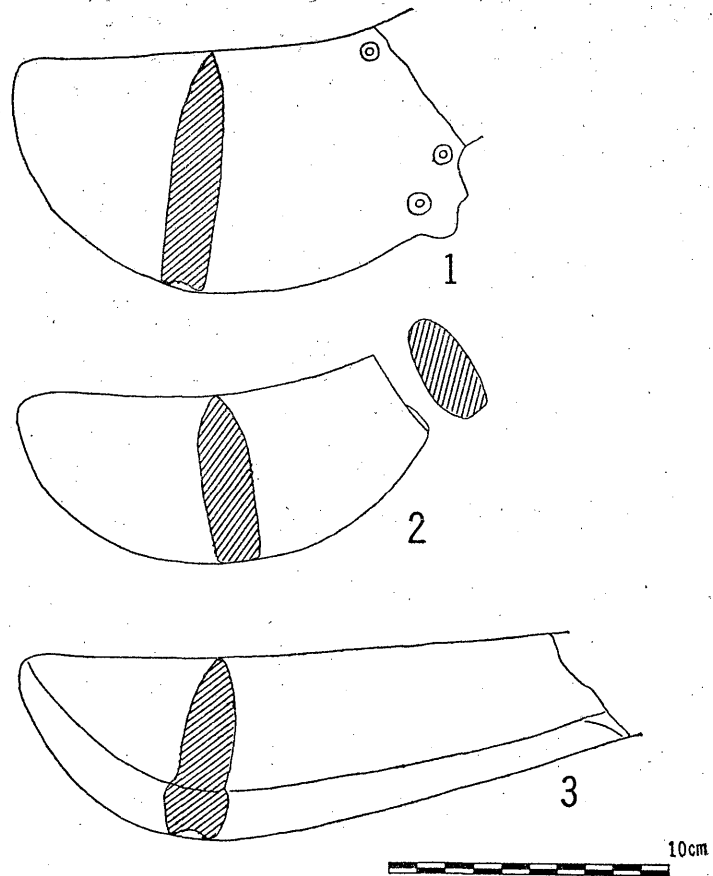
第三図と第六図に示した計一二点の青竜刀形石製品を通観すると、中期のものは刃状部が巾広く、半円形に近い形態をなし、刃の側の基部が柄に接するところが顎状に顕著な段をなし、刃の側の基部に疣状の小突起を付すものはない。また刃部の中央を通る溝はほとんどのものに認められるが、大成村都遺跡出土例のように欠くものもある。この時期のものは刃状部の厚さが後期のものより一般に概して厚く、二センチ内外のものが多く、

これに反し後期末に近い時期のものは刃状部の中が狭くなり、刃状をなす部分が長く楕円状になり、刃の基部に疣状の小突起が付き、厚さも中期のものに比して薄く、一・五センチ内外となつてゐる。また刃状部が柄部に接する顎状の部分



第六図 (Fig. 6) 縄文時代後期の青竜刀形石製品

- |      |        |        |       |
|------|--------|--------|-------|
| 1. 都 | 2. 袖の平 | 3. 藤株  | 4. 櫃割 |
| 5. 峠 | 6. 上尾田 | 7. 川原平 |       |



第七図 (Fig. 7) 異形青竜刀形石製品

1. 四ツ石 2. 九十九沢 3. 大膳館

の段が低くなり、目立たなくなっている。

後者が後期末の作品であることは、上尾田の館遺跡が後期末の土器のみを出土の小遺跡であつて、他形式の土器片が全く認められない事実からしてほぼ確定的とみられるところであり、また秋田県藤株、青森県十腰内小字猿沢遺跡などは晩期の土器を出す遺跡として著名であるが、後期中葉から末までの形式の土器も発見されており、後期末に近い土器に伴つたものと見るべきであろう。何故ならば晩期の土器のみを出土する著名遺跡からの確実な発見例は全く知られていないからである。

従つて製作の時期は縄文時代の中期初頭頃から後期末頃までと考えられる。この種石製品が何故晩期まで存続しなかつたか、晩期に不用となつたと見られる点は、この種石製品の用途を考究する上に重要な事実が背後に隠されているような気がする。

第七図2は秋田県大曲市おおまがり九十九沢つくもりざわ遺跡出土のもので、柄部は欠損している。

第七図3は宮城県登米郡東和町大膳館遺跡出土のもので、本例も柄部を欠損している。また本例は形態も他のものと若干異り、ほとんどのものが硬質の安山岩系の岩石で製作されているのに対し本例のみは暗紺黒色をした頁岩製である。第七図2、3はいづれも分布の南限をなすものであり、特に3は一点のみ分布の中心圏から隔絶した場所にあり、(第二図



参照) 特異な例であるかもしれない。

## 考 察

本石製品の用途について、本石製品は出土遺跡地名表に記す如く五〇例中、完形品は約三分の一にすぎず、多くのものは刃部のみで、柄の方は、基部近くで折損している。これは使用中に折損したものと考えられる。しかし前述したようにこの種石製品は硬質な安山岩質の岩石を丹念に研磨して製作した精功な石製品であり、日常の用具として常時使用されていたものとは思われない。折損した石製品を観察しても使用痕と思われる痕跡は該石製品のどの部分にも見られず、かえって近世遺跡地が畑地になつて、発見されるまでに耕作などの時に鍬先にあたつてついたと思われるきず痕などが見られる。岩手県軽米町袖ノ平遺跡出土の該石製品には刃部中央は径約一糎大の円形の敲打痕が片面のみに見られる。この部分は僅かに凹んでいる、袖ノ平のものは片面であつたが、北海道久遠郡大成村都遺跡出土の該石製品には刃部の基部近くの、対象的位置に径約一糎の円形敲打痕が表裏に残されている。(第六図1、2)

また函館近郊練瓦台貝塚出土のものは該石製品の片面が剝離しているため一面は不明であるが、残存面の中央より若干下方に径約一糎余の浅い円形の敲打痕のある凹みが認められる。これに類似のものとして、嘗つて神田孝平が淡匠迂夫の筆名で明治二〇年東京人類学会雑誌上に発表した<sup>(1)</sup>青森県東津軽郡三厩村算用師発見のものがあるが、現在この石製品の所在は不明となつている。雑誌上に掲載の図面と説明文によれば、『此石器両面各二箇ノ輪紋ヲ浮刻セルハ類品中ニ未タ曾テ見サル所ナリ』とあり、同誌付図のペン画に見るように、中央部と基部近くに径約一糎余の円形の浅い凹みがあり、その周囲が環状に僅かに高くなつていようである。この種の類品は他にないようである。以上の四例の僅かな浅い凹みが指先でもあてるところとでり、すべり留めであるとすれば、このことから用途を追究する端緒が握めそうであるが、指先

のすべり留めであるという確たる証拠も把握されていないし、五〇例近い発見例のうち、僅か四例のものにだけ見られるということは、この石製品に必要不可欠のものがどうか疑いことになるが、しかし何か用途を知る上に重要な鍵となるもののようにも思われるので、一応注意を喚起しておく次第である。

また東北大学文学部考古学研究室蔵の青森県算用師出土品、青森市教育委員会保管の同市横内字四ツ石遺跡出土品（第七図1）の二例は柄状の部分の折損面に近い、青竜刀の刃状をなす部分の基部に、折損後柄状の部分と紐で緊縛して接続する目的をもつて穿れたと思われる孔が、前者には二孔、後者には三孔あり、特に後者は折損部に接近して穿孔され、緊縛して接続させるための貫孔であることが歴然たるものである。なお径一糎前後の貫孔が、刃状部の中央に一個穿孔された例が他に（北海道松前町伊勢畑貝塚出土品）一例あるが、これは柄部の折損した部分を緊縛接続のための穿孔ではないと考えられる。僅か二例であるが、瘤状突起のある後期後半の時代の作品に、折損後も緊縛補修して使用したかと思われる例が存在することは、これも用途を考究する上に重要な意義をもつもののように思われるがいかなものであるうか。

次に青竜刀形石製品出土遺跡の景観がどのような場所であるかについて調査した結果を記そう。現海岸線に直面する海岸段丘上の遺跡から発見のものは、北海道美谷、都、伊勢畠、練瓦台。青森県算用師、宇鉄、深浦麿木、同岡崎など北海道西南部日本海岸から青森県西部の日本海岸の段丘に限ってその出土例が見られる。いづれの遺跡も遺跡地に接近している海岸へ流れ込む急傾斜の小流がある。このような小流にも鮭鱒類は遡行するとの話も聞いている。

北海道女名沢、青森県最花 宮滝、十腰内猿沢、川原平、砂子瀬宮元 赤石種里、青森市細越、戸山、横内四ツ石、二ツ森貝塚、五戸町、是川中居、岩手県櫃割、上尾田館、袖ノ平、峠、水切場。秋田県小坂町鴉、同細越、鷹巣町藤株、柏子所相染森、刈和野、神宮寺、九十九沢などは内陸部の河川にのぞむ台地に所在の遺跡である。このうち宮滝、十腰内、川原平 砂子瀬は岩木川流域。中居、上尾田、袖ノ平は新井田川流域、鴉、小坂細越、藤株、柏子所は米代川流域という

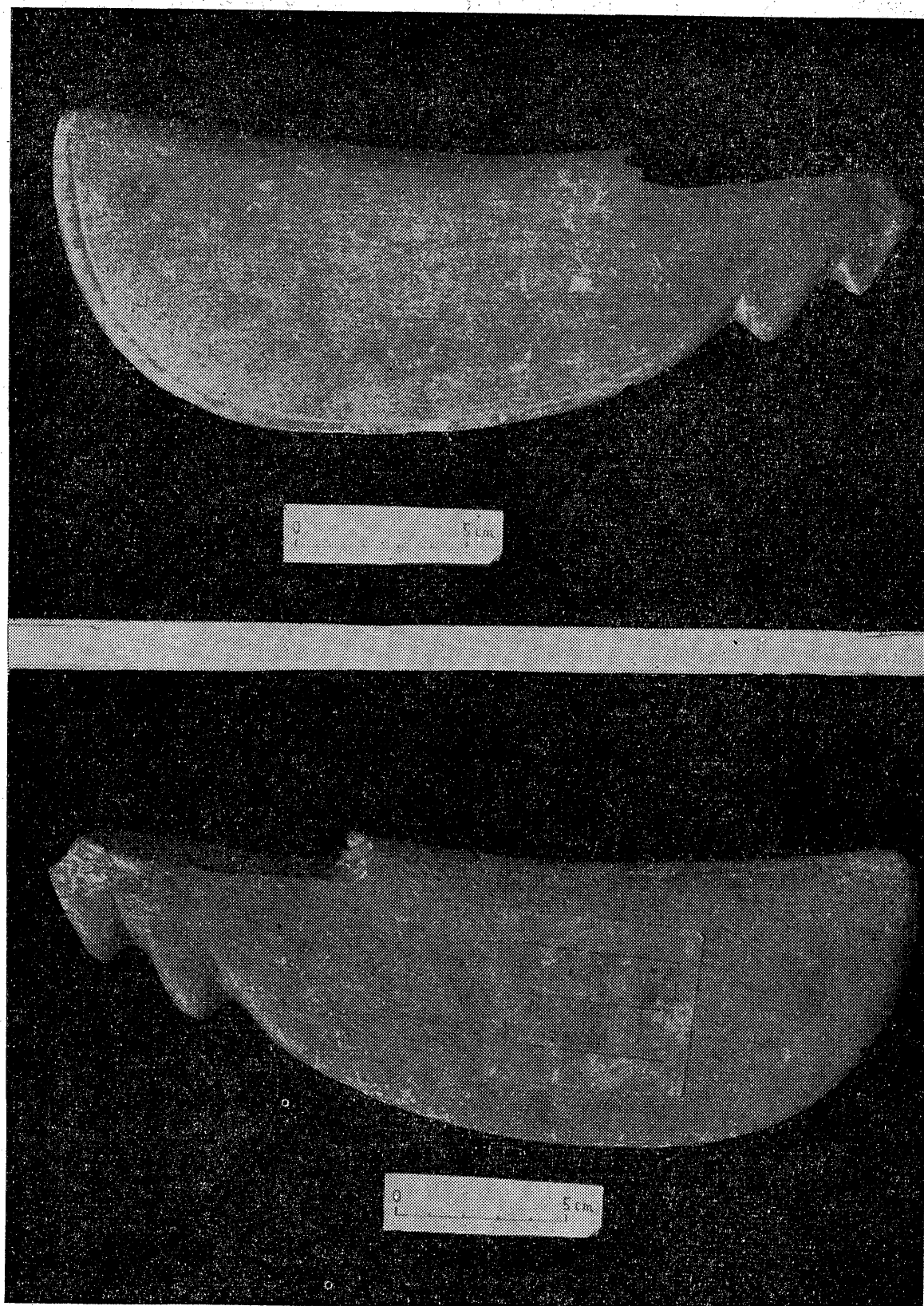
ように鮭鱒類が多数遡行する大河川の流域から比較的多く発見されていることは注目すべきであろう。その他のものにしても、女名沢遺跡は汐泊川、青森県最花遺跡は田名部川、青森市細越遺跡は入内川、同四ツ石遺跡は合子沢川、種里遺跡は赤石川、二ツ森貝塚は七戸川、五戸町遺跡は五戸川、櫃割遺跡は川尻川など比較的水量豊かな小河川に面するものが多い。鮭鱒類が遡行する河川に面するところに所在する遺跡から、僅か一点乃至は二点発見されるこの青竜刀形石製品とどのような因果関係があるものか、皆目まだ検討もつかぬものであるが、遺跡の立地景観からも何か重要な鍵を発見できそうに思うので、一応遺跡の立地についても記した次第である。

以上に記したように、

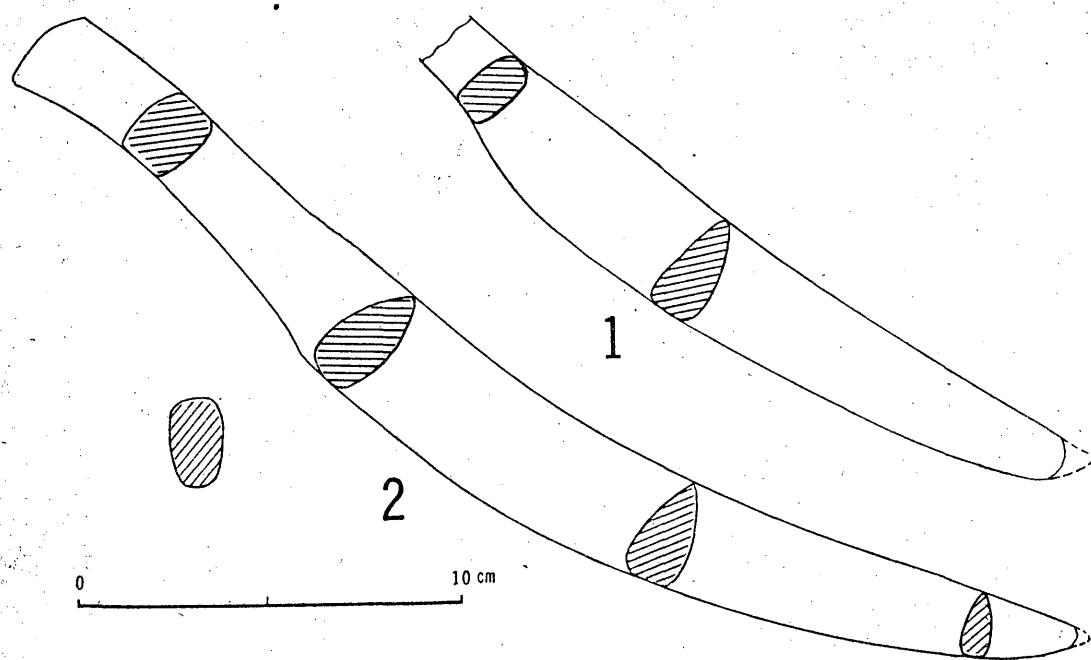
1. 何か他の堅い、石のような物体をたたいて、その衝撃によつて柄状の部分の基部から折損したものが多いこと。そして刃状をなす部分の破片の発見例は多いが、柄と思われる部分のみの破損品の発見例はほとんど全く知られていない現況であり、柄状の部分が逆に打ちおろす先端部で、青竜刀状の刃の形をなす部分が、手で持つ部分であるかもしれないとの疑問も生ずるものである。

2. 以上のほか分布圏が渡島半島から奥羽地方北半部に限定され、前期から中期に円筒土器文化が繁栄した地域と略同一の地域に分布するという事実、この種石器は中期から後期までの間につくられたという時間的制約などが今日までに判明したもので、直接用途を説明するような証左は今日までの研究ではまだなにも把握されていない。

なお第八図写真に見られるような鯨骨製品が青森県天間林村二ツ森貝塚から発見されている。この骨製品は中期後半の土器に伴ったものらしい。この骨製品も柄部を欠損している。石製品以外に骨製品が存在すると云う事実も用途を究明する上に、何かの手がかりを握める資料となるかもしれない。



第八図 (Fig. 8) 青森県上北郡天間林村二ツ森貝塚出土の鯨骨製青竜刀形骨製品



第九図 (Fig. 9) 縄文時代後期の刀状石製品

1. 浪板 2. 保土沢

### 青竜刀型石製品と石刀（刀状石製品）

青竜刀型石製品に類似の形のものが同一時期頃に作成されていないか調べてみると、一般に石刀と称呼されている全面磨研された刀状の石製品がある。その中でも特に青竜刀形石製品は類似点の多いものがいくつか知られている。（第九図1、2）

第九図1は岩手県気仙郡三陸村大字越喜来<sup>おつきらい</sup>字浪板<sup>なみのた</sup>の縄文時代後期の土器片を出土する遺跡からの発見品で、紺黒色の粘板岩製である。1は頭部を欠損している。2は久慈市侍浜字横沼小字保土沢の縄文時代後期の土器片を出土する遺跡からの発見品で、同じく紺黒色の粘板岩製である。

この二個の刀状の石製品は後、晩期の遺跡から発見される他の一般に石刀の名称で呼ばれている石製品とも関連あるものと思われるが、比較的肉厚で、長さが他の石刀の呼ばれているものに比べて短く、青竜刀形石製品に類似点もあり、刀であれば刃とすべきが肉厚で、背の側が薄く磨研されて刃のような状態になっている点は、青竜刀形石製品、一般に石刀と呼ばれてきた石製品とも共通するところである。しかし前節でも記したように、青竜刀形石製品には一、二の例外を除いては水成岩質の軟質の岩石で製

作したものはない。ところが本二例や、石刀と呼ばれる石製品は頁岩、粘板岩などの水成岩質の岩石か、変成岩質の岩石など比較的軟質の岩石を磨研して製作している。このような石質の相違などを考えると、形に類似点はあつても関連性は極めて薄いものかもしれない。

## 結 語

青竜刀形石製品は特異な形態をした石製品であるため、古くよりその存在は知られていたが、その用途、作成年代なども漠然とし分布圈についても明確な調査を行つたものはなく、奥羽地方北半に発見されることを指適している程度である。筆者がここ十数年間に丹念に調査した結果は第二図の分布図に示す如く、北海道渡島半島から秋田、岩手県北部地方に及び、例外的な一例が宮城県北部の北上川流域に見られる。

この青竜刀形石製品の分布圈は縄文時代前、中期の円筒土器の分布圈と大略一致していることは注意を要する。

またこの種石製品の製作年代は中期初頭から後期末までである。後期中葉から晩期にわたつて作製された所謂石刀との関連性も考えられるが、その用途が同一目的のものかどうか、まだ皆目不明である。また前期の円筒土器下層式の時期に、この種石製品の祖形をなすと考えられるものが存在しそうであるが、まだ明確に把握されておらない。

また五〇例中の約五分ノ三が柄状の部分を折損したものであり、柄状部の破片の発見例がほとんど知られていないことは用途を考究する上に注目すべき事実と思われるが、その用途については皆目見当をつけられない現況である。何か儀礼的な用途で打ちおろす際に、硬質の岩石などに誤つて衝突させて折損したものであろうか。

発見遺跡の景觀についても本論で記したが確たる特徴は認められない。

なおこの種石製品のほとんどが硬質な安山岩質の岩石でつくられている事実も、今後用途を究明する上に、重要な手が

かりになるように思われる。

また五〇例からの発見例が知られているが、考古学者によつて発掘されたものは折損品が数例あるのみで、完形品の出土状態のわかるものは皆無である。このようなことも用途究明上の障害となつていふように思われる。

以上今日までの集成研究の概要を発表し、読者諸賢から新事実について御教示を願ひたいと考え筆をとつたものである。最後に多くの資料について研究発表の便宜を与えられた所藏家各位、慶大文学部考古学研究室へ貴重な資料を御寄贈下さつた北海道美谷小学校中村俊井先生、八戸市の鷹屋敷謙次郎氏、岩手県平内小学校の佐々木益弥先生に対し衷心感謝の意を表する次第である。

なおまた石製品の図面などの作成にあつては研究室の可児弘明氏の協力を得た、記して謝意を表する。

註

(1) 東北大学文学部の伊東信雄教授はかなり以前より本石製品についてかなりの関心を持たれていたのである。

(2) 淡厓迂夫 津軽ノ考古家藤田氏ヨリ送ラレタル古物ノ記 東京人類学会雑誌 第2巻19号 明治20年9月

青竜刀形石器出土遺跡地名表

出土遺跡地名	所藏者	伴出土器形式	石質	長さ	備考
1 北海道寿都郡寿都町大字歌棄町字美谷 美谷小学校付近	慶大考古学 研究室	中 期 末	青灰色 安山岩	現存部 一九センチ	柄部欠損
2 " 久遠郡大成村都 久遠郡大成村	田 中 貢	中期後半	安山岩	二六センチ	完形品
3 " 爾志郡熊石村	現在所在不明				柄部欠損雲根志 に記載品
4 " 檜山郡上ノ国村上ノ国山神社跡		上ノ国八幡宮	輝石安 山岩	三七・五センチ	完形品



出土遺跡地名	所蔵者	伴出土器形式	石質	長さ	備考
5 北海道松前郡松前町伊勢畠(貝塚)	松前町松城小学校	中期	青灰色 珩岩	現存部 二〇センチ	柄部欠損
6 " 函館市亀尾字女名沢		後期末乃至 晩期初頭	安山岩	現存部 九・二センチ	柄部欠損
7 " 亀田郡亀田村練瓦台	函館市立博物館	中期末乃至 後期初頭	安山岩	現存部 三センチ	半面脱落 柄部欠損
8 青森県東津軽郡三厩村算用師官山	(本山考古室 蔵)			現存部 三センチ	柄部欠損
9 " 東津軽郡三厩村算用師用畑	東北大学文学部 考古学研究室		凝灰岩 又は珩岩	現存部 六センチ	柄部欠損
10 " " 宇鉄元宇鉄					真偽疑問の標品
11 " むつ市田名部町最花	角鹿扇三	中期末?	輝緑安山岩	三センチ	鉄砲形異形品
12 " 弘前市船沢宮館					柄部折損
13 " " 十腰内猿沢	現在所在不明 故長見精旧蔵	後期末?	安山岩	三センチ	完形品
14 " 中津軽郡西目屋村川原平暗門ノ滝付近				三・八センチ	完形品
15 " " 砂子瀬宮元	砂小瀬小学校	中期末	灰褐色 珩岩	現存部 三センチ	柄部及び先端部 欠損
16 " 西津軽郡深浦町大字麴木津山	吉田清	前期末~中期	青灰色 安山岩	三・五センチ	完形品
17 " " 大字深浦字岡崎	円覚寺	中期	安山岩	現存部 三・五センチ	柄部欠損
18 " " " "	"	中期	"	現存部 一六センチ	柄部欠損
19 " " 鯨ヶ沢町大字赤大字種里	元赤石八幡宮蔵			三センチ	火災で焼失 完形品
20 青森県青森市細越	成田祐之	後期	輝石安山岩	現存部 一六センチ	柄部欠損

21	"	戸山	浜田喜四郎	中	期	安山岩	現存部 一七センチ	"
22	"	横内四ツ石	青森市教委	後期	札地式	安山岩	現存部 一六センチ	"
23	"	上北郡天間林村大字榎林字貝塚 小字二ツ森(貝塚)	二ツ森小学校	中	期 末	鯨骨製	現存部 一四・五センチ	"
24	"	三戸郡五戸町	音喜多富寿			灰色 安山岩	現存部 一九・五センチ	"
25	"	八戸市大字是川字中居	八戸市教委	後期	後半?	安山岩	現存部 一九・五センチ	"
26	"	"	"	"	"	"	現存部 一六・五センチ	柄部及び先端部 欠損裏面剥脱
27	"	"	現在所蔵者不明				現存部 約二〇センチ	柄部欠損
28	"	(旧八戸町内)	東大理学部 人類学教室			安山岩	三センチ	完形品
29	岩手県九戸郡種市町櫃割	慶大文学部 考古学研究室	後	期		輝石安山岩	二七・三センチ	"
30	"	軽米町大子上尾田小字館	"	後	期 末	"	三・七センチ	"
31	岩手県九戸郡軽米町大字軽米小字袖ノ平	軽米町教委	後中 期期 末末 頭)			"	三・四センチ	"
32	"	二戸郡一戸町字峠	一戸町教委	後	期 末 ?	暗灰青色 安山岩	三・七センチ	"
33	"	"	有坂鋸蔵旧蔵品				現存部 一六センチ	柄部欠損
34	"	岩手郡松尾村水切場		後	期 ?			柄部欠損
35	宮城県登米郡東和町米谷小字大膳館	登米高校	後	期		暗紺黒 色頁岩	現存部 三センチ	異形品 柄部欠損
36	秋田県山本郡八森町大字小入川字浦田	現在所在不明						完形品菅江真澄 の紀行文にあり
37	"	鹿角郡小坂町大字上向小字鴉	三上登	中	期	安山岩	三センチ	完形品

	出土遺跡地名	所蔵者	伴出土器形式	石質	長さ	備考
38	〃 〃 細越	慶大文学部 考古学研究室		輝石安山岩	現存部 一六・七センチ	柄部欠損
39	〃 北秋田郡鷹巣町藤株	天理参考館 (清野謙次旧蔵)	後期末?	輝石安山岩	二九・四センチ	完形品
40	〃 能代市柏子所相染森	秋元利吉	中期大木8・9式			柄部欠損
41	〃 南秋田郡五城目町高崎中山	村上孝之助			現存部 三センチ	柄部先端部欠
42	仙北郡西仙北町刈和野農地試験所付近	西仙北町公民館	大木7・8・9式?	安山岩	現存部 一七センチ	柄部欠損
43	秋田県仙北郡神岡町神宮寺字愛宕下	渡辺秀之助				
44	〃 大曲市内小友小字九十九沢 <small>つくもりざわ</small>	興野義一		安山岩	現存部 一四・五センチ	柄部欠損
45	青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字赤石字種里	種里八幡 宮旧蔵品				記録と挿図のみで大 きさなど不明完形品
46	青森県出土と云う	柴田常恵旧蔵品 現在所在不明			三三・五センチ	二つに折損して いるが完形品
47	青森県出土と云う	東京某氏蔵品				古美術商より 伝聞完形品
48	出所地不詳品	桜井克興		安山岩	三八・八センチ	完形品
49	〃 (旧本山考古室蔵品)	関西大学 考古学研究室		緑泥片岩	三三・二センチ	明治四年刊横山 由清著「尚古図 録」に掲載品
50	〃	大英博物館			三三センチ	

# 青竜刀形石器製品関係文献目録

木内 石亭 雲根志 第三編 五卷の一三

北海道江指村近郷熊石出土 一八〇一年(享和元年)

菅江 真澄 真澄遊覧記 柯素武都奇保辞

青竜刀形石器の絵あり 一八一七年(文化四年)

秋田県山本郡八森町小入川字浦田出土のもの

T. KANDA Ancient Stone Implements Sc. Japan

一八八四年(明治一七年)

第一〇図版二、三 いづれも出土地不詳

神田 孝平 日本太古石器考(前掲書の和文解説)

一八八六年(明治一九年)

第十図版第二図 原形三分一 俗ニ青竜刀石ト名ツクル者ナ

リ 形ハ裁布刀ニ似タリ 質ハ緑泥岩ナリ

第三図 青竜刀石ノ柄ヲ欠損セル者ナリ

淡厓 迂夫 津軽ノ好古家藤田氏ヨリ送ラレタル古物ノ記 東

京人類学会雑誌二卷一九号

一八八七年(明治二〇年九月)

(神田孝平) 青森県東津軽郡三厩村算用師官山出土品の紹介と

西津軽郡種里村八幡社の神宝にも青竜刀形石器二のあること

を記す(図あり)

坪井正五郎 ロンドン通信 東京人類学会雑誌五卷五三号

一八九〇年(明治二三年八月)

青竜刀形石器考

青竜刀の項に大英博物館所蔵品中に大和出土という青竜刀形石器のある旨図入りで報告している。大和某地は恐らく日本某地の意味で恐らく奥羽地方北部の発見品と思われる。(長さ一尺一寸五分と記してある)

羽柴 雄輔 青竜刀石ニ就キ 東京人類学会雑誌七卷七六号

一八九二年(明治二五年七月)

北海道後志国岩内出土と云う青竜刀形石器に近似の形の石器を図入りで報告。青竜刀形石器の古形式のものかとも思われるもの。

中沢 澄男 日本考古学 博文館

八木契三郎 一九〇六年(明治三九年十二月)

P. 一二八に青竜刀石の項あり。簡単な解説あり

石田 収蔵 口絵写真説明 東京人類学会雑誌二五卷二八六号

一九一〇年(明治四三年一月)

薙刀形石器の名称で、青森県八戸市附近発見の二例の青竜刀形石器を口絵写真で紹介解説している。

杉山寿栄男編 日本原始工芸 工芸美術研究会

一九二八年(昭和三年二月)

第一八八図版一、二に二点の青竜刀形石器の写真が掲載されている。一は東大人類学教室蔵 青森県八戸市発見の長さ三二センチの完形品 二は故有坂鋁蔵博士旧蔵品 岩手県二戸郡一戸町出土品 柄部欠損し 現存部は長さ一六センチ  
杉山寿栄男編 日本原始工芸概説 工芸美術研究会

P.二八に簡単な解説あり

一九二八年(昭和三年六月)

中谷治宇二郎 日本石器時代提要 岡書院

一九二九年(昭和四年九月)

P.二九五～七に有角石斧と共に、青銅製品、西日本の弥生文化の影響を受けて発生したものではないかという新説を発表している。掲載写真は岩手県二戸町出土の有坂博士旧蔵のもの。

中村良之進 中津軽郡裾野村大字十腰内字猿沢並附近発掘石器

並土器拾遺 陸奥考古二 一九三〇年(昭和五年五月)

十腰内故長見精氏蔵と云う長さ一尺一寸八分の青竜刀形石器を名称不明のものとして図示する。これに類似のもの西津軽郡深浦村円覚寺に一箇と同郡種里村の奈良氏宅に二箇所蔵されている旨記している。

八幡 一郎 日本考古図録大成 第拾五輯 石器 骨角器 日

東書院 一九三三年(昭和八年八月)

青森県八戸市出土という青竜刀形石器一点を掲載し、簡単な解説あり

この青竜刀形石器は東大人類学教室に写真原板があるもので、青森県弘前市十腰内猿沢遺跡出土のもので、同所の厳鬼山神社の社掌の長見精氏旧蔵品 全長約三五センチ

大場 磐雄 日本考古学概説 日東書院

一九三四年(昭和九年二月)

簡単な解説あり

大場 磐雄 考古学 現代哲学全集一六巻 建設社

一九三五年(昭和一〇年三月)

簡単な解説あり

中谷治宇二郎 日本石器時代に於ける大陸文化の影響

考古学 五巻四号 一九三四年(昭和九年四月)

有角石斧と同様に青竜刀形石器も弥生文化の影響によつて発生した石器と考えた中谷氏の考えを詳細に論じたもの

笹沢 魯洋 下北地方誌(増補四版) 下北新報社

一九三四年(昭和九年六月)

写真図版二二の一に青森県下北郡田名部町(現在むつ市)最花出土品の写真が掲載されている。

中島 全二 田名部附近の先住民族遺跡遺物の研究

(国史研究) 一九三四年(昭和九年一〇月)

青森県師範学校附属小学校初等教育研究会刊

青森県むつ市田名部町最花出土の青竜刀形石器の写真を掲載して簡単に紹介しているが、著者は剣状石器と呼んでいる。

末永雅雄篇 富民協会農業博物館 本山考古室 図録 目録

一九三四年(昭和九年十二月)

一二頁九七、九八(九九の図とあるものが九八のもの)に青竜刀形石器の図あり。二点とも故神田孝平男爵より本山考古室へ入つたもの

九七は出土地不明 九八は青森県算用師官山の出土品で東京

人類学会雑誌二卷一九九号に報告されたものと同一品

中谷治宇二郎 日本先史学序史

皿石器発見史 一〇神代石と石器の項 一二三―四頁で

雲根志 真澄遊覧記などに記された青竜刀形石器の絵も入れて解説している。

角田 文衛 陸奥榎林遺跡の研究 考古学論叢 第十輯

一九三九年(昭和十四年一月)

本貝塚出土の鯨骨製の青竜刀形骨製品を图示して報告している。柄部欠損 現存部長さ二四・五センチ

大山 柏 史前人工遺物分類 一石器

史前学雑誌一一卷一・二・三合併号

一九三九年(昭和十四年八月)

六、未詳石製品 I、中大型品 4 青竜刀石として簡単に解説している。

後藤 守一 先史時代の考古学(少年向) 續文堂

一九四三年(昭和十八年一月)

青竜刀形石器を子供にわかり易く簡単に解説している。

酒詰 仲男・篠遠 喜彦・平井 尚志 考古学辞典 改造社

一九五一年(昭和二十六年四月)

青竜刀形石斧として解説し、東北地方の後期の遺跡から発見される特別の石器で類例は非常にすくない、と記している。

小林 行雄 日本考古学概説 創元撰書 創元社

一九五一年(昭和二十六年二月)

## 青竜刀形石器考

第六章 縄文式時代の工芸 P. 四九に青森県西目屋発見という青竜刀形石器の実測図あり、これは中津軽郡西目屋村川原平出土のもの。五〇頁に簡単な解説あり。

千代 肇 北海道南部に於ける遺跡及び遺物の考古学的研究 (プリント) 一九五二年(昭和二十八年四月)

(昭和二十七年文部省科学研究費奨励助成金の報告)

一四頁下段―一五頁上段に「青竜刀形石器」の項を設け、亀田郡亀田村本町練瓦台貝塚出土の青竜刀形石器(柄部欠損)と函館市見晴町出土の青竜刀石器?を報告している。図あり。

八幡 一郎 日本考古図録 朝日新聞社

一九五三年(昭和二十八年四月)

三二頁のグラビア九三図に青竜刀形石器として三点の写真が掲載されている。図版解説は誤りあり、ここに訂正して記す。

上段 出土地不詳 桜井克興氏蔵 長さ三八センチ

中段 青森県むつ市田名部町最花出土 角鹿扇三氏蔵

長さ三八・五センチ

下段 秋田県南秋田郡五城目町高崎字中山出土 村上孝之助氏蔵 長さ三一センチ

解説に「そして後期の終り頃には、それまで見られなかった石刀、青竜刀石器、御物石器、両頭石斧(独鋤石)などという非実用品や、用途の明らかでない種類のものが出現した。」

八幡 一郎 日本史の黎明 ―有斐閣全書― 有斐閣

一九五三年(昭和二十八年六月)

P. 八四に簡単に記してある。

清野 謙次 日本考古学人類学史 上巻 岩波書店

一九五四年(昭和二十九年二月)

第三編 石器研究史 第二項 三、青竜刀石とし、雲根志、神代石図、真澄遊覧記などに掲載のことを記す。

斎藤 忠 日本考古学図鑑 吉川弘文館

一九五五年(昭和三十年一月)

東北大学考古学研究室蔵の青森県東津軽郡三厩村算用師、用畑出土のもの。写真に掲載する。柄部欠損、長さ八・三センチ、簡単な解説あり。

大場 利夫・半沢 信一・松崎 岩穂・宮下 正司 檜山南部の遺跡 一九五五年(昭和三十年七月)

北海道江差町教育委員会 上ノ国村教育委員会 上ノ国村山神社跡遺跡出土の青竜刀形石器を図示して解説している。完形品、長さ三七・五センチ

江坂 輝弥 考古学ノート二 先史時代Ⅱ 縄文文化

日本評論新社 一九五七年(昭和三十三年七月)

一四〇～四頁 七用途不明な遺物 この項において青竜刀形石器について、その分布圏、伴出土器などについてかなり詳しく記している。本石器が晩期のものでなく、中期末から後期のものであることを最初に記した文献。

江坂 輝弥 日本歴史大辞典一一巻 青竜刀形石器(P. 一三〇) 河出書房新社 一九五八年(昭和三十三年七月)

上記文献と大略同じことを記している。

水野 清一・小林 行雄編 図解考古学辞典 創元社

一九五九年 (昭和三十四年六月)

小林 行雄 青竜刀形石器

小林の筆になる本稿は、従来の所説をそのまま紹介し、秋田・青森・両県下に少数発見例があるのみで、伴出する土器の型式など充分調査されていない、と記している。(青森県西目屋出土のものを図示している。)

佐野 大和 日本の古代文化 ―考古学要説― 小峯書店

一九六〇年(昭和三十五年一月)

IV 縄文式の工芸技術の項で簡単に記している。

永瀬 福男 刈和野の青竜刀型石器 秋田考古学二三号

一九六三年(昭和三十八年十二月)

松下 亘 北海道出土の青竜刀形石器

考古学雑誌五〇巻四号 一九六五年

(昭和四〇年三月)

なお本研究に対し昭和三五年慶応義塾大学学事振興資金の交付を受けた。また英文抄録については学友萩田朝雄氏の協力を得た。